

三河商人道

PART
152

磯部ろうそく店
九代目 店主

磯部 亮次 君



青年部とは人生のすべて



青年部では会長をはじめ数々の要職を歴任され、後輩たちからは兄貴的存在として慕われる磯部亮次さん。八幡町にある磯部ろうそく店の九代目として1700年代から変わらぬ伝統製法で和ろうそくをつくる職人であることはあまりにも有名です。

そんな磯部さんも最初から和ろうそく職人を目指していたわけではなく、大学を卒業後、大手コンピューター関連の会社にお勤めでしたが、お父様の突然のご病気をきっかけに急遽お店を継がれる決心をされたのが今から25年前。実家の家業とは言え、それまで全く経験のない和ろうそく作りをされることになった時も、お店をなくしたくない一心で「1年でうまくなる人もいれば、10年経ってもうまにならない人もいる」と自分に言い聞かせ、がむしゃらに頑張られたそうです。

その当時作った、今の磯部さんからすると「とても下手な和ろうそく」を文句ひとつ言わずに買ってくれたお客様は、翌年もまた買いに来てくれ、地元の暖かさと同時に商売の厳しさを改めて感じられたとのこと。その後も和ろうそく作りに打ち込んだ磯部さんは、単に製造にとどまらず、和ろうそくの歴史的、文化的価値を表現され、今では遠方からのお客様や有名人もわざわざ買いに来て来る人気店となっています。

青年部には、お店を継がれたばかりの頃、どうやったら和ろうそくとお店を多くの人に知ってもらえるかを考え「思いついたら、考えるより先ず行動！」がモットーの磯部さんは、近くの雑貨屋さんへ飛び込みで訪問した際に出会った青年部の本間先輩に、知り合いも増えるし勉強にもなるからと誘われ、29歳の時入会されました。当時青年部でやっていた「商い塾」では、尊敬でき、憧れる先輩たちとたくさんのお会いがあり、仕事観や、自分の考えを表現する時に大切なノウハウを学ぶことができ、今でも仕事をやる上でのベースになっているそうです。

青年部の思い出を話し出したらキリがないという磯部さん。そんな磯部さんにとって青年部とは、何ですか？と質問すると、迷わず「人生の全て」と答えられました。「大人になってからは全てが青年部。仕事でもプライベートでも。行動する時、相談する時、困った時にはいつも青年部の人々が助けてくれた。全てが人づて。いつも一緒にいてくれた。」と力強く語られました。それもそのはず。2011年1月の磯部ろうそく店の全焼火災があったのは記憶に新しいところですが、その全てを一瞬にして失い、生きる気力さえ無くしかけた時、真っ先に救いの手を差し伸べてくれたのは、やはり青年部の仲間たちだったそうです。

お話は尽きないところ、最後に後輩たちへのメッセージをうかがうと、「青年部では、自分を主体に考えずに、これをやると本当にみんなのために良いだろうと思う事を提案して欲しい。本気で話し合うと本当に仲良くなれます。また、青年部ではお金は絡まない。お金は絡まないから手を抜く人と、お金が絡まなくても本気で活動する人がいます。お金が絡まなくても本気の人は、仕事になれば当然真剣にやってくれる。青年部では自分の生き方をみんなに見られている事を忘れないでほしい。」と締めくくっていただきました。



八幡町にある磯部ろうそく店



工房で蠟を塗り重ねる作業中の磯部さん



取材スタッフと記念撮影



取材担当／広報委員会
杉浦尚、浅井寮子、
谷口純典、神尾尚宏、
小出寛之